２０20年度　聖心会みこころセンター講座
講師：シスター菅野敦子「聖マグダレナ・ソフィアのお話」の資料（第４回～第６回）

マグダレナ・ソフィア・バラ　（第４回）
第８章 内なる旅・政教との関わり

聖心会の統治（ｐ２０６）

相談役　：　主要メンバー　カトリーヌ・ドゥ・シャルボネル…総会計となる（第二回総会で選出される）
ジョゼフィーヌ・ビジュー

修道院長の**育成**（修道院長養成のためもあった）→常に連絡をとりあった

仕事の内容・・・修道院と学校の運営。

地元の行政や教会権威者と折り合いをつける。

霊的指導や霊的援助を授け、 聖心会の霊的ヴィジョンにかたちを与え、維持すること。（院長たちは何も分かっていなかったから…）

秩序、清廉、倹約・・・清貧を生きる道の大切さを皆に説く

→院長たちは不慣れであったため、試行錯誤で仕事を果たした。

１８２２年　　ソフィーの人生における危機と死別の悲しみ

グルノーブル修道院の運営が、７年間の負債が続き順調でなくなる

テレーズ・マイシューが院長であったが失敗。

そして、マリー・ドゥ・ラ・クロワが責任者となるが健康を損なう。

事態の収拾をはかり、ソフィーがグルノーブルに赴くものの、

借入金に７パーセントの高利がついていた。（テレーズの失敗のため）

→ 修道院の破産・・ソフィーは負債の大半を処理した。

そのため重い病気にかかり危篤状態になった。

「姪のドジテーが叔母であるソフィーに命を捧げる」という逸話がある（P.210～211）

＃１ドジテーは熱病でなくなる。叔母の身代わりと考えられた。
（姪の死後、ソフィーは体調を回復した）

＃２霊的指導者モンテーニュ神父様の死。
ソフィーは落胆し、力を落とす。

＃３ソフィーの母の死。１８２２年６月２１日 。

１８２４年　　ソフィーの人生における大きな霊的な喜び

ソフィーの大病後、シャンベリー教区内の宣教担当のジョゼフ・マリー・ ファーヴル司祭との出会い。霊的指導者となる。 彼の神概念はジャンセニズムと違い、温かく、慈愛に満ち、人間を受け入れる神の姿を提示した。

ファーヴル司祭 の手紙での助言

P.214 「*人生で根本的な指針として、神との親しい一致を優先すること。*」

ソフィーはこの教えに共感した。人生の仕事において進むためにより深く、強い何かを求めていた時期だったので、彼の教えは意味があった。彼を通して、みこころの内実、神を愛し、神の裁きを咎めも脅しもされずに神に愛されることの意味を体験した。

教会から会憲の承認を受けるまでの過程　　盛式誓願（定住誓願）の認可の問題（P.218）

1．会憲と会則に添えられた嘆願書の作成の署名５名とその他

総 長　　ソフィー
総長補佐　ジョゼフィーヌ・ヴィジュー　　アンリエット・グロジェ
総長顧問　ユージェニー・ドゥ・グラモン
フランス宮廷司祭　　聖心会の聖職者総長 ドゥ・クロワ猊下（げいか＝高僧）

2．　教皇庁との対立　　**教会の権威、男性社会という厚い壁があった**

◇手続きの開始

ソフィーは議論に一切出席しなかった。

・会憲の目標と霊感、霊性、教育の仕事は高く評価された。
・キリスト教的価値観を復活させる女子修道会であれば、支持され歓迎された。

◇会憲に変更が求められた内容：**盛式誓願の宣立の文言の必要性**

・修道生活を厳格に、禁域制度を守ること・・教会権威によって守るべきことであった
（女性は、常に男性の許可なしに自由が認められない社会であったため）
・教皇からの正式認可を求める場合は、盛式誓願の宣立が必要
※誓願には、単式(simplicia)と盛式(solemnia)の区別がある
盛式誓願はより厳格な誓願であり、教会がそれを盛式と認める必要がある

ソフィーが望んだ盛式誓願：　終生誓願「定住誓願」を立て、教皇のみがこれを免除できる誓願。これは革新的なものであった（P.221）教皇のもとの厳格な禁域制度は求めなかった。しかし、教皇のもとで禁域制度が遵守されることが前提であったため、　聖心会には許可は与えられなかった(P.226)

従来の禁域制度では、女子修道会の「修道女」が完全に〈この世〉とも呼ばれた社会とのあらゆる接触を完全に絶つことが求められた。

◇ソフィーの請願書は、教皇庁の制度と対立するものであった。
彼女が教皇だけが無効化できる盛式誓願を望んだ理由

①彼女は、修道女がある程度可動力が必要であると実務的に考えた（旅をする時、移動する時）
②教育の仕事そのものの要求。　より近づき易い、また厳しいが、よそよそしくない姿、会そのものを生徒や両親に広く印象づけること。

ソフィーの狙いは、（学校教育の面から）聖心会が禁域制度の制約から解放されることであった。

P.223～　　ソフィーの想いが綿々と綴られている

禁域制度の基本的な彼女の考え方

「*特別な方法で隣人の益と奉仕のために働こうとする、この修道会の精神と目的に応じて、*

禁域制度が緩和され、変更され、適応されねばならない」。
…教皇庁の会への介入に対するソフィーの憤慨であった。　（P.226 を読む）

◇ソフィーは、許可を得るために教皇庁と妥協し、定住誓願を導入

１８２４年　**フランス政府**が全ての女子修道会に**法的介入**をする
政府の法的認可の宣言
①各修道会は、１８２７年１月１日以前に会の規則を提示し、政府の認可を得ること
②この日付に提出日を損ねた修道会は、フランス内での一切の法的身分を失うこと
→この政府の認可宣言に対して、
ソフィーの苦渋の判断は、「*聖心会の更なる安定がもたらされる*」
※当時の政府は、修道会に対して温和な態度で接していた。
政府当局と国家の代理人である司教たちの権力乱用の危険性が低かったため。

１８２６年９月２９日　**第三回総会**開始　認可の問題を引きずりながら…

◇聖心会の会憲：ローマで認可の公式手続きが終わる
ローマからの認可待ちは長引く
会憲の認可の困難さの問題は、会がフランス国外に修道院を有していたこと。
― サヴォワ、ピエモン、ルイジアナ―
ローマの法律とフランスの法律との緊張関係があった

１８２６年１１月　ソフィーは法的認可を申請すべきと提案
→皆の賛成をへて 聖心会の規則が提出された
１８２７年４月２２日　認可の国王布告が与えられる
（このことで、対立、会の分裂、傷痕が残る）

◇会の急速な発展（P.217）による議論
修道生活や学校運営への要望に関する業務の論議 ―修道院の人事関係、修道院の財政状況；：
会員の霊的指導、下層中流階級のための教育についての提案がなされた。
原則として、貴族と上層中流階級
貧困層に的を絞った

→この決定によって、聖心会の評判が確実なものとなった
＊ソフィーの考え：富裕層と孤児は総長の守護聖人のお祝い日には参加できる。
通学生は校長の守護聖人のお祝日に参加できる
ソフィーの関心は富裕層と貧困層が会の主たる関心であり、
通学生は違う範疇にあった
＊一人の会員がソフィーに手紙を送り、総会に質問を提示してほしいと依頼。
１８２９年１０月１０日（P.229「*わたしたちは・・・*」）
＊ロザヴェンのレオポルヒーヌディーヌ･ノーデへの手紙　１８２１年

マグダレナ・ソフィア・バラ（第５回）
１８２７～１８２９（P.235）
ローマと更なる拡大 トリニタ・デイ・モンティ

１８２７年３月 聖心会会憲の認可　教皇レオ１２世

会憲の変更が付け加えられた
＊総長の職が廃止されたこと　総長ではなく、ローマ教皇庁の枢機卿の配下になった。
即ち、教皇のおひざもとになった（近くなった）
＊禁域外での活動許可を得たこと　「活動する女子修道会」として唯一無二のもの
＊「ローマにおいて・・・」を読む
（ソフィーは、この喜びのニュースをフィリピンに伝えている）

１８２８年春　聖心会の学校設立

トリニタ・デイ・モンティ
会憲は現実のものとなる
教皇レオ１２世からローマに修道院設立の要請があった
条件： 裕福な家庭の子女の教育、貧しい子供たちの教育を併設すること
この条件は聖心会の会憲に合致した

◇修道院・学校設立に向けての協力者（教皇からの個人的な働きにソフィーは驚いた）
＊パリの教皇特使ランブルスキーニ・・教皇に手紙を書く
彼は、教皇にローマに学校を設立するよう、「ソフィーに手紙を書くよう」 提案し　た。
（教皇からソフィーに手紙を書くように勧める）
＊物件として、ローマのトリニタ・デ・モンテを最適な敷地として勧めた
＊トリニタ・デ・モンテは、フランス領であったがフランス政府とローマとの交渉の結果、
ここに学校を開設することが許可された
＊ローマのロザヴェンとイエズス会士マッサも、レオ教皇１２世に働きかけ、
ソフィーにローマの学校創設の依頼を提案した。
（ソフィーから教皇レオ１２世に手紙を書くことを勧める）
◇経済的援助・寄付
＊アンドラッシダ公爵夫人・・夫から多額の遺産を相続し慈善事業に
＊故ベツロッテン神父から少額の遺産

トリニタ・デ・モンテ修道院：フランス政府から正式に許可を取得

教皇の働きによる認可によって、マザーバラの個人的な権威と名望を高めた
修道院長：アルマンド・ドゥ・コーザン（フランスの宮廷との深い関わり）
※ランブルスキー二とロザヴェンがソフィーに働きかけた
３人のシスター派遣：アルマンド、ユーフロジーヌ、アデル・カイエ

トリニタ・デイ・モンテ修道院について

時は１８２８年、
教皇レオ１２世に聖心女子学院創立の話が
持ち上がった。この教皇は、ローマ在住の子供たちに時代に即した教育を施したいと望んでいた。
→ローマ法王使節ランブルスキー卿に相談。
ソフィーとランブルスキーは懇意な間柄であった。
彼は、ソフィーの人柄と教育の根本精神に敬意を表していた。

教会の歴史：1482 年パオラ出身のフランチェスコがローマ中心のピンチオの丘を通りかかった。若い頃から聖なる人、奇跡をおこなう人として評判が良かった。その評判を聞いたフランス国王ルイ１１世は、彼に病をいやしてもらうために、彼をフランスに呼んだ。
かれは此のピンチオの丘を歩いていた時、「将来、フランス国王のおかげでこの丘の上に、自分が夢見た修道会が創立されるであろう」と預言したと言われている。
1494 年、ルイ１１世の息子シャルル８世は、フランチェスコが父ルイ１１世にした数々の恩恵に感謝して、このピンチオの丘の土地を買うお金を支払った。
このように、預言は 1494 年に実現した。
1594 年 7 月 9 日、トリニタ・デイ・モンティ教会が聖別され完成。

数々の変遷（戦争、破壊、略奪等）を経て・・・

1826 年、トリニタを委託する団体に 3 点の必須条件が出された。
①教育　②宗教性　③フランス性
教皇レオ１２世が賛同し、教育修道院に委任することを認め、フランス政府も了承した。
シャルル王１０世は、支持者が多かったため聖心会を選択した。

マグダレナソフィア（第６回）

１８２７～１８２９年　　ローマと更なる拡大

１８２９年　　教皇レオ１２世の後、ピオ８世。しかし２か月後に死亡
　　教皇グレゴリオ１６世の誕生

◇聖心会の拡大に伴い、入会者の資質の問題が起きる

１８３０年～３３年　　**進行と前進**

＊episodes　　ソフィーは「*一年に７回も転倒した*」と述懐している
　　転倒のせいで痛めた左腕が使えなくなった
　　１８２９年４月　転倒、右腕を痛める。
　　５月　転倒し、ひどく足を痛め、身体の片側があざだらけ
　　６月　５月の転倒で痛めた左腕が使えなくなる
　　８月も転倒
　　１２月も転倒 年末には痛みが悪化し、歩けなくなる…

ソフィーの苦しみ

１８２６年～３２年　　身体の痛みとユージエニーとの対立

①パリの状況の悪化が始ったころから、ユージェニー・ドゥ・グラモンとの関係に亀裂が入る。
事の始まりは、オテル・ビロンに隣接するプティ＝オテルを「無期限でドゥ・クラン大司教に提供したい」とユージェニー。それをソフィーは拒否した。
ユージェニーは、アミアンの校長として権威を振るい、院内では支配力が強まっていた。
ソフィーがフランス内外を旅している間、ソフィーを排除しようと画策した。
②ソフィーの霊性が排除される→指導司祭ファーブルの霊的援助で癒される
③コレラの発生

１８３２年３月　　ヴァレンヌ通りの修道院に孤児を収容する
　　ローマ・トリニタ・デ・モンテ修道院の訪問

１８３３年　　足の痛みが回復。ソフィーは自由に歩けるようになる。
　　ヴァチカンにて教皇謁見を果たす。
　　ローマ滞在中 ソフィーは教皇グレゴリオ１６世に３回謁見。
　　教皇は、聖心会の教育の仕事に好意的であった

1830 年代　背景

	フランス国内	聖心会
1815 年	ブルボン王朝復活 ルイ１８世即位	第１回総会開催
1820 年		第２回総会開催
1824 年	シャルル１０世即位 アンシャン レジームの栄光への憧れ （１７８９年革命以前の絶対君主制・封建社会へ戻る） 王朝復活により、社会の緊張感が増し 不穏な動きとなった	聖心会の危機的状況 ①聖心会がヴァレンヌ通りのフォーブール・サン＝ジェルマンの中心地に位置していたこと ②急進的な王党派の根拠地にオテル・ ヴィロンがあったこと
1826 年	**シャルル王朝** 急進的反革命が優勢になる ・議会の選挙権を富裕者に限定したこと ・報道の自由を妨げたこと	第３回総会開催 会憲の認可を受ける （教皇直属となる・禁域外許可）
1828 年～	フランスの主要都市で革命派と反革命派が決起	イエズス会の教育活動の禁止 の声が高まる 会員の追放・解散
1830 年	７月革命 ７月２７日～２９日 シャルル王失脚 コンフロンで暴動 イエズス会神学校攻撃される	聖心会の危機・計画を練る ◇ニコライ伯爵とその家族に解決を求めた ◇コンフロン大司教ﾄﾞｳ・クラン邸に移る 後に焼失される ◇ソフィー…スイスで一時、牧歌的な生活を過ごす。そしてパリへ。
	８月 オルレアン派のルイ・フィリップ即位 社会安定	ソフィーと付添人は、ヴァレンヌ通りに戻る

ちょっとこぼれ話　　P.272 ジョアニーの家族との定期的な連絡

ソフィーは、甥スタニスラスへの手紙の中で
「***その日の朝に作ったグージェール（チーズ入りシュークリーム）、小さなペストリーの御菓子…***」を注文している。

ソフィーが愛したアミューズ〈 グージェール gougère 〉

フランス、ブルゴーニュ地方の郷土料理で、チーズ風味のシュー生地菓子
白ワイン又は、軽めの赤ワインに合う
フランスの代表的なアミューズ（おつまみ）

★基本的にはチーズのみを生地に入れますが、 ベーコンも入れたバージョンのご紹介です。

約４０個分（焼き上がりは、ピンポン玉サイズ）　＊所要時間約９０分

【材料】・水　９０ｇ
・牛乳　９０ｇ
・バター　８５ｇ（有塩バターの場合は、下記の塩はなし）
・塩　一つまみ
・薄力粉　１００ｇ
・卵　３個　（Ｌサイズ　１８０ｇ）
・【A】胡椒とナツメグ　少々
グリエールチーズ　６０～８０ｇ（ハードタイプのチーズ）
エダムチーズ等の粉チーズ　適量
ベーコン　（５～７mm 角、お好みで　約５０ｇ程度）

1. 薄力粉はふるっておきます。バターは適当な大きさに切ります。

2. 鍋にバター、水、塩を入れ中火にかけ、煮立ってバターが溶けたら火からおろし薄力粉を入れ、木ベラでよく混ぜ合わせます。再び中火にかけ鍋底に白い膜がつくまで練ります。

3. 鍋を火からおろし、溶き卵を少しずつ加え混ぜ合わせ、ぼってりするくらいのかたさになるまでにします。

4. 【A】を加え混ぜ、オーブンペーパーを敷いた天板に大さじ１くらいずつおとし、ブラックペッパー、塩を少々振り、200 度のオーブンで 25-30 分焼きます。